

過去に神様転生を書いたことのある作者が読むと、昔を思い出して「うわああああああゴロゴロ！」ってなるお話

ぽぽりんご

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトルの通り。

みんなゴロゴロするといい。

ぼくはゴロゴロした。ゴロゴロゴロゴロ！

# 目次

過去に神様転生を書いたことのある作者  
が読むと、昔を思い出して「う  
わああああああゴロゴロ！」ってなる

お話

---

1



過去に神様転生を書いたことのある作者が読むと、昔を  
思い出して「うわああああああゴロゴロ！」つてなるお  
話

はじめまして、セントヴィンセント田中です。ポイント：前書きで自己紹介。

初めて小説というものを書いてみました。勢いだけなのでこの先は考えていない！  
嘘である。実はこの先1000年の歴史まで考えている。

イチヤラブものが苦手な方はブラバ推奨。そんな推奨の仕方で大丈夫か？

原作は未読です。その先は地獄だぞ。

でも、二次創作知識だけで書いてる人もいっぱい知ってるので、なんとかなると思っ  
てます。・人生は恐れを知らぬ冒険か、無のどちらかである。――ヘレン・ケラー（西

暦1880～1968年）

・恐怖と勇気がどんなに近くに共存しているかは、敵に向かって突進する者が一番よ  
く知っているであろう。――モルゲンシュテルン（西暦1871～1914年）

・もう何も怖くない。私、一人ぼっちじゃないもの！――バマミ（まどかマギカ第1

話々第3話)

ところで、F G Oの新章、とても面白かったですね！ 小説と全然関係ない話に飛ぶ。

僕は、なけなしのお小遣いを注ぎ込んだんですが、新サーヴァントを引けませんでした…… 個人的な近況を報告する。あと、アナルが弱そうなサーヴァントが好き。

まあ、僕には嫁のジャンヌオルタちゃんがいるので幸せなんですけどね！ 嫁の宣言を入れる。

ツイッターの感想を調べた限りでは、最弱のアナルの持ち主ともつばらの評判。

あまりにも弱い。

彼女の嫉妬パワーのせいでガチャ爆死したと思っておきますか。

嫉妬深い嫁だと苦勞しますねwww 嫉妬かどうかは知らんが、イラツとするのは確か。

皆さんは、誰が好きですか？ 読者への問いかけ。

話題に困っただけで、別に本気で聞きたいわけでは無い。

思い返してみれば、初期の頃は読者への興味も薄かった気がする。

皆さんはどうでしたか？ \*10

では、本編スタート！ 読者の体力を削ってから本番を始めるスタイル。

俺の名は神墮武 神人。 重要ポイント：名前が読めない

どこにでもいる普通の高校生。 どこにでもはいない。 お前の脳内にだけ。

神墮武流古武術の後継者だ。 古武術とか習得しがち。

「その時、不思議なことが起こった！」という展開になっても、すべて古武術で説明できる。 便利！

武術をたしなんでいた俺だが、文明の利器にはかなわなかった。

やれやれ、鍛え方が足りなかったか。 じつちゃんに叱られるな…… 親は出てこない

が、祖父は存在することが多い。

そう。俺は道路に飛び出した子供を救おうとし、トラックにはねられてしまったのだ。 トラックは、神のミスを誘発／死者蘇生／異世界への扉を開くなど、多彩な能力を持つている。 ついでに荷物を運ぶこともできる。

俺は天涯孤独の身の上。 じつちゃんは？

幸せに生きたため心残りは一切無い。 唯一心残りがあるとすれば、あの子猫が無事だったかどうかということか。

ああ、駄目だ。 意識が、薄れ……

「ゴーン! なにかと擬音で表現しがち。

どこか神聖さを感じる鐘の音某自動車会社 元社長とは関係無い。に、俺は目を覚ました。

目の前に広がるのは、真っ白な空間。 背景を考えるのは面倒だからね。しようがないね。

あたりを見渡すと、唯一その空間の中で色を放っている存在に目がとまる。

美しい女性だ。その女は、こちらに向かって土下座をしていた。 土下座スタイルが基本。

「ぼくならたとえ自分がミスしたとしても絶対に謝らないが、神はえらいので謝罪する。」

俺は女に声をかけた。

「何をしている……面おもてを上げよ」 オリ主が無礼千万なのはデフォルトだが、中には無礼を通り越して將軍様スタイルの者も存在する。

俺がそう声をかけると、女は頭を上げて語り始めた。

「ごめんなさい。私のミスで、本来死ぬべき運命になかった貴方が死んでしまったの。本来トラックの方が爆発炎上するはずがいや、そうはならんやろ。素材の強度単位を間



違えたせいでヤードポンド法は死ぬべき。貴方の体が……死ぬ運命になかった貴方が突然消えた結果、世界のバランスが崩れようとしています」

「なんと」世界のバランスは、ジェンガよりも崩れやすい。

「貴方の住む地球と、周囲の異世界は常に力の釣り合いを取りつつ運用しなければならぬ。すべての世界、その活動エネルギーを螺旋回転でいい感じに収束（中略）でないと魔神サンサターンウィークエンド二世が復活し、全てが週末の闇へと消えてしまう」設定は語るが、この先の物語には特に関係ない。

そう言った女は、真剣な表情で俺の目を見据えた。

「だから、貴方を『機動魔法戦士ガンダム』の世界に転生させてください。この宇宙を救うために」

「そうだったのか……して、おぬしは何者なのだ」

「私は神よ」

「そうだったのか……」もうちよつと何か言うことあるやろ。

俺は顎に手を当て、考えた。

この展開は知っている。Web小説でよくある神様転生というやつだ。

この先、俺は原作キャラを救済したり、原作の無能キャラに制裁を加えたりするのだろうか。アンチ・ヘイトは念のため。

まあ、俺は小説とかつまらない物に興味ないし全部同じにしか見えないし伝聞で聞いただけだが、クラスの隅っこにいる連中によるとそんな感じらしい。なんだあ……：てめえ……：

ふむ、なるほど。悪くない。えらそう。オリ主は神様よりもえらい。

「いいだろう、転生しよう。だが謝罪は不要だ、神ごときに憐れみを受けるいわれは無い。死すら俺の人生を彩るスパイスに過ぎない。俺が俺であり続ける限り、俺の世界は輝き続ける」 思いつきで薄っぺらい言葉を並べがち。

唯一の心残りがあるとすれば、ライバルとの決着を付けられなかったことか。

幼なじみで、やたら俺の世話を焼きたがるあいつ……：白皇 閃花とは、昔から競い合ってきた。

いつか決着を、と思っていたが……：フツ、俺は恐れていたのかもしれない。彼女との戦いを。 Q：あなた、心残りは無いと一言言ってませんでした？

A：そうでしたっけ、うふふ。

「私のミスで死んだのに、私を責めないなんて……：貴方、いい人なのね。ちよつとカッコいいかも。ポツ」 なんだかよく分からない理由で惚れられる。おそらく正気を失っていると思われる。

そう言って、女は俺に寄りかかってきた。

柔らかい感触が俺の腕に触れ、そこからほんのり体温が伝わってくる。神とは言っても、人とはほとんど変わらないようだ。サラサラとした髪からは、心地よい匂いが漂ってくる。まるで1000年熟成させたワインのような、人を酔わせる魔性の香りだ。くさそう。説明に背伸び感が見られる。

「やれやれ、女は苦手なんだがな。どう接すればいいのかわからん」 たぶん男への接し方もわかっていないのだが、男キャラとコミュニケーションを取ろうとしないため真相は不明。

「ふふ、硬派なのね……ミスしたお詫びといっってはなんだけど、貴方にチート能力を授けてあげるわ」世界のバランスはどうした。

「チートか……ならば、SSSSSSSSSSSS級の魔力を頂こう」 Sを沢山くっつけりゃ良いつてもんじゃねーです。

ここで、俺は少し考える。

「あとは、そうだな……最強の機体・ネオストライクフリーダムジャステイスアルティメットガンダム重要ポイント：名前が読めないに、宇宙一の才能。F a t eの無限の剣製……あと、ナルトの影分身も頂こう」 圧倒的に不足しているコミユニケーション能力は欲しがらない。

ネオストライクフリーダム、ジャスティス、シンロンガンダムとは、俺が考えたオリジナル機体だ。

無数のスーパードラグーンによる空間支配に加え、強力な近接戦闘能力を誇る、まさに最強の座にふさわしい存在。

むろん常人では操作など不可能であろうが、この俺であれば問題なく操れる。 Q :  
そんな機体で大丈夫か？

A : 大丈夫だ、問題ない。

万が一、いや億が一にも無理だった場合に備えて影分身を用意しておく周到さ。仮にドラグーンの同時操作が無理だったとしても、俺が無数に分裂して同時操作すればいい。 絵面がひどい。

俺は頭がいいのだ。 頭がいい人は、そんなこと言わない。

「俺は最強になりたい。人間ごとき指先一つで消し飛ばせるような、人類を超越した存在に」心に闇を抱えた感じにしておく、あとで過去編を作るときに役立つ と思つてたけど、別段そんなことはなかったぜ。

俺はそう言つて、神に目を向けた。

それまで大人しく俺の言葉を聞いていた女だったが、俺と目が合うなり、赤くなつた顔を必死に逸らして狼狽える。

「か、勘違いしないでよね！ 見とれてたわけじゃないのつ。好きになっちゃったとかじゃないんだから！ 人間なんか、好きになるわけないんだから！」

明らかに様子が変だ。

気にはなるが、俺としてはそれより見過ごせない言葉があった。

だから、それを指摘してやる。

「人間なんか、という言い方は好きじゃない。人を見下すのは止めろ」 鏡を見たことはあるか？

俺の言葉に、女はハツとした表情をする。

「そ、そうね……撤回するわ。人を見下すのは、よくないことよね」

「フツ、失礼な奴だが……自身の過ちを素直に認めたのは賞賛に値する。好感が持てるな」

「こ、好感って……好きってこと？」

「言ってしまえば、そうなるな」

「は、はわわわわ……むきゆう」 謎の効果音を発するヒロイン。

しばらく変な動きをしていた神は、やがて決意したのか、腕を空に突き上げてこう言った。

「決めたわ。私、貴方についていく！」 軽い感じで職場放棄をかます神。宗教家は死

ぬ。

「いいののか？ 俺なんか付いてきて」 ぼくもそう思う。

「いいの。決めたの。私は、この胸の高鳴りを信じて突き進むわ！」 自分ほど信じられないものは無いという見本。

「やれやれ、面倒な事になってきたぞ……だが。面白くなりそうだ」 面白くなりそうな気配は特にない。

こうして俺は、”機動魔法戦士ガンダム”の世界に転生した。

これから俺が、何を思い、何を成すのか……それはまだ、誰にも分からない。当たり前前やろ。

いかがでしたか？ 最近、Google検索によく引つかかるようになった定型文。

この世界から駆逐してやりたい。

続きは近いうちに投稿するつもりです。 近いうちと言ったが、具体的にいつとは言っていない。

その気になれば10年、20年後の投稿も可能ということ。

この先、神墮武 神人はいつたいたいどうなってしまうのか！ とうご期待！ 過去の自分にアドバイスを送るとしたら、もっと具体的にどう面白くなるのかを提示すべきと言いたい。

期待は、して貰うものではない。させるものなのだ。

……ふう、うまく終えられたかな。

じゃあ、幕を閉じて、と…… 訓練された読者は、もうこの時点で不穏さを感じ取れる。

あつ、ちよつと閃花さん。後書きスペースに入つてこないでくださいよ！

閃花「そんなこと言つてられないわ。どういうことよ！ 私が出てきてないじゃない！」 キャラと作者の座談会は、なぜか創作したことの無い人も恥ずかしくなつて床をゴロゴロしてしまふ。

これを、共感性羞恥という。

いや言葉の意味はよく知らないのだが、たぶんきつとそう。

そう言われなくても、まだ導入部分なので……

閃花「……仕方ないわね。この詫びはケーキ一つで許してあげるわ。でも、次の話に

は必ず出しなさい。これは命令よ」

そ、そんな無慈悲な！ 僕にも計画というものが！

この後、神様視点のサイドストーリーがあるんだ！ 視点を変えて同じ話をしがち。

亜種として、過去編を挟みまくるといふパターンもある。

作者（ぼく）の後ろ向きな姿勢が現れていたのかもしれない。

閃花「うるさいうるさいうるさい！ 私が出ない物語なんて、卵のない月見うどんのようなものよ！ というわけで、次からは超絶美少女の閃花ちゃんが出演します！ 読者のみんな、期待して待っててね（はあと）」 美少女と気軽に言うけれど、人物の外見描写って難しくない……？

そんなー。

あ、感想お待ちしております。 待ち人こず。